様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：37105
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520620
研究課題名（和文）　認知言語学的観点に立った学校英文法の再構築

研究課題名（英文）　A New Approach to School Grammar: Based on Cognitive Linguistics

研究代表者
川瀬　義清（KAWASE YOSHIKIYO）
西南学院大学・文学部・教授
研究者番号：20108616

研究成果の概要（和文）：本研究は，学習者にとってより負荷のかからない学校英文法を構築することを目的とし，認知言語学に基づく教授法を開発し，日本人英語学習者を対象として，教育効果の実証研究を行うとともに，教員免許状更新講習において，中学・高等学校の英語教員に対して，新しい教授法について指導を行った。その結果，本研究で開発した学校英文法およびその教授法は，中学・高等学校の英語教員が，容易に活用できるかというと，必ずしもそうともいえない部分がまだ存在するが，学習者の理解を促進する教授法であることが実証できた。

研究成果の概要（英文）： The main purpose of this study was to develop a new and learner-friendly school grammar based on the findings of cognitive linguistics focusing on two main issues: learnability and teachability. The quantitative analyses focusing on learnability have revealed that the new approach shows pedagogically more effective than the traditional approach. This study has also analyzed teachability issue based on qualitative approach. The results show that the new approach has potential, although the on-site teachers also experience anxiety about using it. The results show that it is necessary to develop worksheets and teaching manuals that the teachers can easily use without possessing linguistic knowledge.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育，認知言語学，学校英文法，第二言語習得

１．研究開始当初の背景

第二言語習得に関する研究が始まって久しいが，語彙や意味に関する研究はあまり行われてこなかった。これは第二言語習得研究に影響を及ぼしてきた言語学理論である構造主義言語学やその後の生成文法が，統語に関する問題を中心に扱ってきたためである。また，Georgetown University の Andrea Tyler 教授が 2008 年ドイツで行われた LAUD Symposium の基調講演において指摘しているように，過去 50 年間の言語学の発達にも関わらず，50 年前に行っていた英

文法の説明と同じ説明を現在も教室内で行っており，学校で教授される文法も大きな変化を見せていない。

言語学の分野において，1980 年代後半より認知言語学の研究が盛んに行われるようになり，英語の文法を支えている概念構造がかなり明らかにされてきた。認知言語学では，言語のあり方は認知の主体である人間が外的世界をどのように認識しているかによると考え，人間の現象学的・民俗的な身体感覚に起因するとものとして体系的な記述を試みている。それら認知言語学の知見を，近年，第二言語習得，特に文法書の記述や英文法の教授に応用しようとする流れが見られるようになった。しかしそれらの研究は，ヨーロッパやアメリカなどの，対象言語である英語のインプットが教室外で比較的豊富である環境を対象として行われている。また，被験者となる学習者の母語はヨーロッパ系の言語が多いという特徴がある。認知言語学の分野では，異なる言語，例えば英語と日本語を比較する際，両者を単なる記号の羅列ではなく，その背景にある認知的な違いを含めて比較している（池上, 1981; 池上, 2006 他）。つまり学習者の母語が異なれば，物事に対する認知的なとらえ方の違いが存在する。そこで本研究では，日本語を母語とする英語学習者に対象を絞り，日本語と英語との間に見られる言語の認知的・類型的な違いをもとに，英語学習者にとってより負荷の少ない学習者文法を導入すべく，学校英文法の再構築を目指して研究を開始した。

２．研究の目的

本研究は，認知言語学の知見と学校英文法との融合を行い，新たな視点に基づく学校英文法を構築することを目的とする。

本研究は特に，日本語を母語とする英語学習者を対象とし，研究期間内にこれまで英語教員が学習者に覚えることを強いてきた文法・語彙項目である以下の項目を中心に取り扱う。

（1）名詞の可算・不可算
（2）冠詞
（3）前置詞

これらの項目について，学習者にとって有益であり，かつ英語の習得をより容易にする文法を構築するとともに，構築した学習者文法を教育の現場で実際に教授し，その学習効果の検証を行う。さらに教員免許状更新講習において，開発した教授法を公開し，中学・高等学校の現場で英語を教えている教員に対して，その活用可能性を探る。

本研究を進めることで，認知言語学の知見と学校英文法との融合を行い，新たな視点に基づく学校文法を構築することが可能となるであろう。また平成 21 年度より始まる教員免許更新制に伴う講習を通して，本研究課題で得られた成果を広く現場の英語教員に公開することで，戦後 50 年間にわたりほとんど変化が見られなかった学校文法に，新たな息吹を与えることを目的とする。

３．研究の方法

本研究では，研究代表者は認知言語学の立場から理論的な分析および言語現象の説明を行い，本研究全体を統括する。共同研究者は第二言語習得論の立場からデータの分析および学習文法の構築に責任を持った。具体的には，以下の流れに沿って研究を行った。

（1） 日本国内の中学校・高等学校で用いられている英語教科書のデータベース化および文法記述の整理

（2） 文献調査
① 認知言語学および第一言語習得，第二言語習得研究の分野における文法研究のまとめ
② 学習参考書における文法事項およびその記述の整理

（3） 認知言語学に基づく教授法の開発
（1）および（2）の結果に基づき新しい教授法の開発

（4） 教育効果の検証
本研究課題で開発した教授法について，定量的調査に基づく実証実験の実施

（5） 教授可能性についての検証
本研究課題で開発した教授法を，平成 21 年度より開催される教員免許状更新講習において公開，指導し，その教授可能性について検証調査を実施

（6） まとめ
（4）および（5）の結果に基づき，新しい教授法の普及とその課題について検討を実施

４．研究成果

研究前半において行った，認知言語学および第一言語習得・第二言語習得に関する学術書から高等学校生徒を対象とする学習参考書等まで広げた文献調査，および中学・高等学校の主要な英語検定教科書のデータベース化に基づき，以下の文法項目の教授法を構築した。

（１） 加算・不可算名詞
（２） 前置詞
（３） 五文型

この教授法に基づき，（１）および（２）について，日本人英語学習者を対象として，教育効果の実証研究を行った。特に長期的に教育効果が持続するかどうかという観点に着目し，従来の学校文法で用いられている教授法と，本研究課題で開発した認知言語学に基づく教授法とを比較・検証した。その結果，どちらの文法項目においても，長期的な教育効果が統計的に有意に現れていることが分かった。教授法の Learnability（教育効果）は実証研究で証明されたが，果たして学校現場へ応用可能であるかという Teachability の問題も無視できない。そのため，平成 21 年度から始まった教員免許状更新講習において，中学・高等学校の英語教員に対して，上記（１）から（３）の３つの文法項目について認知言語学に基づく教授法を紹介し，どのように教授していくかについて指導を行った。さらに更新講習で気づいたこと，感じたことを自由に記述してもらい，そのデータをテキストマイニングの手法で分析を行った。その結果，現場の教員にとって，認知言語学に基づく教授法は，これまでの暗記一辺倒の指導法と違い，魅力的に感じられる一方，認知言語学について専門的な知識を持たないものが，果たして効果的に教授できるかという不安が浮かび上がってきた。

本研究課題を通して，認知言語学に基づく学校英文法およびその教授法は，学習者の理解を促進する教授法であると言うことは実証できた。しかし，日夜，中学・高等学校の現場で教育活動に携わっている英語教員が，容易に活用できるかというと，必ずしもそうともいえない部分がまだ存在する。今後，この教授法を広く普及させるためには，単に教授法を開発するだけでなく，ワークシートや教授用資料等の教材の充実，および教員への効果的な研修制度の確立が欠かせないであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 川瀬義清・長 加奈子，学校英文法と言語学の接点―認知言語学からの提言，西南学院大学英語英文学論集，査読無，50 巻，2010, pp. 267-279.
② Kanako CHO & Yoshikiyo Kawase, Effects of a Cognitive Linguistic Approach to Teaching Countable and Uncountable English Nouns to Japanese Learners of English, ARELE, 査読有, vol. 22, 2011, pp. 201-215.
③ Kanako CHO & Yoshikiyo KAWASE, Developing a Pedagogical Cognitive Grammar: Focusing on the English Prepositions, *in*, *on*, and *at*, ARELE, 査読有, vol. 23, 2012, pp. 153-168.
④ 長 加奈子，認知言語学と英語教育―言語理論と英語教育の関係に焦点を当てて―，北九州市立大学基盤教育センター紀要，査読無，第 12 号，2012，pp. 41-58.

〔学会発表〕（計 11 件）

① 長 加奈子・川瀬義清，学校英文法再構築―認知言語学からの提言―，第 38 回九州英語教育学会沖縄研究大会，2009 年 11 月 22 日，沖縄国際大学
② 長 加奈子・川瀬義清，日本人英語学習者の可算・不可算名詞の習得について，外国語教育メディア学会 50 周年記念全国大会，2010 年 8 月 4 日，横浜市立サイエンスフロンティア大学.
③ Kanako CHO, The Effects of Prototypicality of the Acquisition of English Prepositions: Applying cognitive linguistics to SLA, 大学英語教育学会第 49 回全国大会，2010 年 9 月 8 日，宮城大学
④ 長 加奈子，認知言語学に基づく教授法：その教育効果を考える，日本英文学会九州支部第 63 回大会　シンポジウム「認知言語学と英語教育」，2010 年 10 月 30 日，九州大学
⑤ 川瀬義清，文法のとらえ方と英語教育，日本英文学会九州支部第 63 回大会　シンポジウム「認知言語学と英語教育」，2010 年 10 月 30 日，九州大学
⑥ 長 加奈子，理論言語学と第二言語習得研究の接点―応用認知言語学から見えてくるもの，北九州言語研究会，2010 年 12 月 18 日，北九州市立大学
⑦ 長 加奈子，前置詞の意味の概念構造に関する実証的研究，第 24 回福岡認知言語学会　シンポジウム「認知言語学と英語教育の接点」，2011 年 3 月 28 日，西南学院大学
⑧ 川瀬義清，日本人英語学習者の受動文概念構造に関する実証的研究，第 24 回福岡認知言語学会　シンポジウム「認知言語学と英語教育の接点」，2011 年 3 月 28 日，西南学院大学
⑨ 長 加奈子・川瀬義清，認知言語学に基づく英語教材開発と教授法：教育効果と現場への応用可能性について，第 37 回全国英語教育学会山形研究大会，2011 年 8 月 21 日，山形大学
⑩ Kanako CHO, Prototypicality and its

Effects on Second Language Acquisition: Where do the prototypes of second language learners come from?, The 16th World Congress of Applied Linguistics: AILA 2011, 2011 年 8 月 28 日, Beijing Foreign Studies University, Beijing, China

⑪ 長 加奈子, 認知言語学に基づく英語前置詞教授法とその効果の検証, 日本認知言語学会第 12 回全国大会, 2011 年 9 月 18 日, 奈良教育大学

〔図書〕（計 1 件）

① Kanako Cho, S. De Knop, F. Boers, A. De Ryker 他 29 名, Berlin: Mouton de Gruyter, *Fostering Language Teaching Efficiency through Cognitive Linguistics,* 担当部分, 単著 'Fostering the acquisition of English prepositions by Japanese learners with networks and prototypes,' pp. 259-275, 2010.

６．研究組織

(1)研究代表者

川瀬　義清（KAWASE YOSHIKIYO）

西南学院大学・文学部・教授

研究者番号：20108616

(2)研究分担者

長　加奈子（CHO KANAKO）

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：70369833

(3)連携研究者

なし　　（　　）

研究者番号：